南阿蘇

吉田 愛梨

里の風

ヨハナさん

半世紀ほど前、私たちが住む家にはドイツ人が住んでいた。戦前からドイツで暮らしていたこの家のご主人は、向こうで出会ったヨハナという女性と結婚。戦況が悪化したため、彼女を連れてシベリア鉄道で帰国した。村では「ハナ子さん」とか「おハナさん」と呼ばれて親しまれていたそうだ。

この家の片付けをしていると、ヨハナさんのものと思われるドイツ語の手紙や本が出てきた。ドイツ語が分かる私たち夫婦がこの家に来たのは、単なる偶然なのだろうか。いや、きっとヨハナさんに呼ばれたのだろう。稲刈りが終わった昨年十月下旬、仕事で一カ月ほどドイツに行くことになった。仕事を終えると、彼女の親せき探しに取り掛かった。

手がかりは古いアルバムと、無作為に選んだ二通の手紙。写真の下にはカタカナで人物名が書かれているが、名字は分からない。手紙は旧字体で書かれていて、私たちにはほとんど読めない。雲をつかむような「調査」が始まった。レンタカーを借りて、消印から見つけた小さな村を訪れる。そこでの聞き込みから、ようやく一人の人物のフルネームが分かった。インターネットで該当する人物を検索すると、同姓同名は六十人弱。帰国まではあと二日ある。できることは全てやろう。そう覚悟を決めて、片っ端から電話をかけることにした。

はじめの何軒かは不在で、数軒目にやっとつながった。「突然すみません。オオツヨハナという女性を知っていますか？」。唐突な問いに、一瞬間をおいて電話の相手が答えた。「それは私の伯母（おば）です」と。興奮する気持ちを必死に抑えてこれまでの経緯を伝えると、彼は快く私たちを迎え入れてくれた。ヨハナさんが亡くなってからちょうど五十年目のできごとである。

その男性の娘、ウテさんが先月ここを訪れた。ヨハナさんの親せきが村に来るのは初めて。ウテさんは十字架が刻まれたヨハナさんの墓石に手を合わせた。墓参りが済むと、近所から人が集まってきた。ヨハナさんが当時は珍しかったパンやケーキを焼いてくれたこと、体格が良くてくんだ水を軽々と運んでいたこと…。初めて聞く大叔母の話を、ウテさんは熱心に聞いた。

彼女は日本に親せきがいることなど知らずに育った。半世紀も途絶えていた「親せき付き合い」の復活。ヨハナさんもきっと喜んでくれていることだろう。

（おあしす米生産者、NPO九州バイオマスフォーラム理事長）

絵・有働　孝昭